

「八雲ゆう遊こいのぼり」開幕

主役は子どもたち

4月10日、松江市八雲町の日吉親水公園で、「八雲ゆう遊こいのぼり」のオープニングイベントが行われました。緋、黄、緑、青、黒…色とりどりの鯉のぼり120匹が、「悠久の河」意宇川を横断して掲げられる「春の風物詩」。桜吹雪の舞うなか、たつぷりと風をはらんで泳ぐ鯉のぼりのもと、家族連れを中心としたおよそ1000人が、悠々かつ和やかなひとときを満喫していました。



たけかや保育園の「親子でダンス」



ひよし保育園の子どもたち



八雲スカイバンド

午前10時、河原でオープニングセレモニーが始まり、主催の「八雲ゆう人会」の石原泰仁会長が挨拶。八雲小学校を拠点に活動している金管バンド、八雲スカイバンドが童謡「鯉のぼり」を奏でる中、意宇川を横断する3本のワイヤロープの内の最後の1本（鯉のぼり40匹）が引き上げられました。

続いて繰り広げられた催しの主役は地元の子どもたち。赤・黄・黒のひとときわ目をひく衣装で「よきこいカンフーハッハッハ」を威勢よく舞った「ひよし保育園」の子どもたち。「たけかや保育園」の年長かぶとむし組は、親子で仲良くダンス。鯉のぼりに合わせたような色鮮やかなポンポンを振って飛び跳ねたのは「八雲保育園・幼稚園」の子どもたち。午後からは、テレビでもおなじみの「よしと」の紙芝居。一緒に歌ったり手拍子をし



「よしと」の紙芝居



八雲保育園・幼稚園の子どもたち

八雲志人館も、水の偉人・周藤彌兵衛翁の銅像付近で、お抹茶の提供と、書籍の展示・販売を行いました。また、松江市大庭町の石倉貸鉢店の協力を得て花も販売。テナント内には、松江市西津田の舟木美代子さん（90歳）から寄贈された「日吉切通し」の絵を展示しました。さらに、三光電業（株）から寄贈されたライブカメラを設置し、会場付近の様子

たり、クイズを出したりする紙芝居と音楽のコラボレーション、参加一体型の「新感覚紙芝居」に子どもたちは釘付けになっていました。この日のテーマは「八雲の食×若者の賑やかし」。八雲の自然で育った猪で作った「イノシシコロッケ」や、八雲の食材で作った「炊き込みご飯」などの出店も多く、イベントを楽しみながら河原で食事する家族の姿がありました。

をインターネットで見られるようにしました。「八雲ゆう人会」のホームページでご覧いただけます。（<http://yakumokoinobori.web.fc2.com/>）「八雲ゆう遊こいのぼり」は5月7日（土）まで続けられ、日曜ごとにイベント（午前10時）が計画されています。4月20日は「はしご車展示」。はしご車のほか消防車、救急車が展示され、子ども用の制服を着ての記念撮影もできます。5月1日は「警察音楽隊による演奏」。屋台の移動販売車が出クチナシ・椿の苗木の無料配布もあります。

最終日の5月7日には、八雲の若い力が集結し「ヤクモノチカラ」が行われます。NPO法人あしぶえサポート会、ぐるぐるフェス実行委員会、八雲ゆう人会などによる出店があります。



お抹茶を提供



日本画「日吉切通し」
（舟木美代子さん）



書籍の展示・販売



「八雲ゆう人会」のメンバー

高年齢者まで全員参加の「八雲ゆう遊こいのぼり」を象徴する存在として、意宇川上空を泳いでいました。孫3人を連れた男性は「若い者がよくが

バーの高齢化によって中断を余儀なくされた「川渡し鯉のぼり」復活でした。そして昨年、地元企業の協賛を得て、「八雲ゆう遊こいのぼり」の開催を実現させました。今年の一歩の目玉は「手作り鯉のぼり」。ひよし保育園、たけかや保育園、八雲保育園・幼稚園、八雲小学校1年生の子どもたちが布に色塗りし、高齢者クラブの皆さんが縫い上げ、八雲ゆう人会が口輪を入れて完成した8匹の「八雲を紡ぐ鯉のぼり」。子どもから青年、高年齢者まで全員参加の「八雲ゆう遊こいのぼり」を象徴する存在として、意宇川上空を泳いでいました。孫3人を連れた男性は「若い者がよくが



周藤彌兵衛翁像と鯉のぼり

主催の「八雲ゆう人会」は、昭和60年、61年生まれを中心とした八雲町で育った、もしくは縁のあるメンバー20数名が、「自然が豊かで魅力あふれる八雲町で、『楽しいこと』を創出し、八雲町の素晴らしさを町内外へ発信していきたい」と、2014年4月に結成した、地域起こしの団体。当初からの大目標が、平成2年（1990年）から平成24年（2012年）までの22年間行われたものの、ワイヤロープを支える鉄柱の老朽化、主催団体のメン



意宇川の水辺で遊ぶ



岩坂御陵と、石原吉郎さん
（『季刊山陰』No31より）

この日の会場となった日吉親水公園の意宇川対岸には、日本の国生みの祖・イザナミノミコトのお墓とされる「岩坂御陵」があります。八雲町日吉の石倉吉郎さんは、昭和46年（1971年）から平成24年（2012年）までの42年間、御陵の「守部」を務め、毎日1回の制服制帽での見回りを欠かさなかつたといひます。

また、この付近の堤防は、戦場に向かう地元の若者を見送った場所です。300mほど下流の切通しを、56歳から97歳までの42年間をかけて開削した周藤彌兵衛翁の銅像と顕彰碑も建っています。

太古から現在・未来を貫く「時の流れ」、受け継がれる人々の「念（おも）い」、そして絶えることのない「意宇川の流れ」――まさに「悠久の河」が流れる場で、未来を担う子どもたちと青年が躍動した一日は、「夢の芽生える文化」、「共感のステージで、対立・統合・発展を繰り返す新しい『和』の文化」を目指す、八雲立つ出雲を原点とする「志のネットワーク」の広がりと「環境観光産業」の創出を確信させました。

（交易場 修）